

真心と誇り 商人の道を築こう (3)

川中 清司

富山短期大学名誉教授
日専連名誉講師

戦後再建した日専連

戦争は人の命を奪い社会を破壊した。軍需中心に企業統合が進み、多くの工場や商店も休廃業に追い込まれた。

日専連は事実上解散したが、商士隊を結成し商業報国運動に移った。

「お互いの消息を連絡し合って再起の時期を待とう」と「日専会」を組織した。

◆終戦・復興・ヤミ商売からの立ち直り

一九四五（昭和二〇）年八月五日、ついに終戦を迎えた。

復員や引揚げで海外から約六三〇万人が国の土を踏んだ。だが天候不順で作物は採れず、配給米では餓えをしのげず、売り食いと闇市でその日、その日を暮らした。工場の生産はストップし、物資は枯渇した。終戦当時の失業者は一四〇〇万人に達した。

焼け跡にバラックを建てた商売が始まった。当時、暴利をむさぼる悪徳商人が横行した。「ヤミ商売でなく、まともな商人の道」と正しい商いを目ざす日専連の同志たちがいた。

◆焼け跡を巡回

◆専門店の再開指導

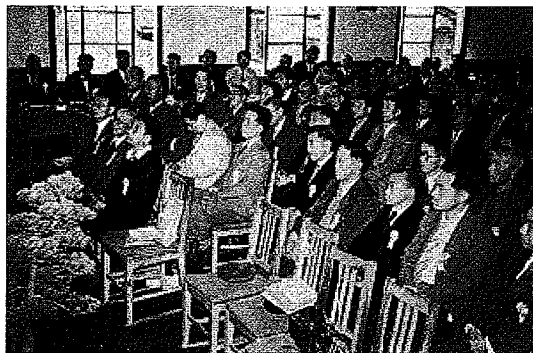
同志たちが各地で日専連精神を掲げて、再結成に向けて立ち上がった。日専連の再発足の準備は昭和二三年ごろから進められた。

岡山の角南九八、中尾鹿太郎、小倉の大鬼悠造の三氏が各地の巡回を始めた。雑誌「商業界」の主宰だった倉本長治氏も加わり、日専連の存在をPRし、再建を説き大きな指導力を発揮した。二四年の春、倉本長治、角南九八の二人が呉市の商店街に神田文生氏を尋ね、「専門店会を再発足するんだ」と励ました。

「ヤミ商人が横行するなかで、呉専門店会の再建が早かったのは、角南さんが人柄者であり、熱心に説かれたからだ。角南さんはわれわれの救いの神であった」と後に日専連の相談役となった神田氏は述懐している。

◆昭和二五年に岡山で日専連再生

昭和二四年の秋、箱根湯本の「いちの湯」で発起人会が開かれた。岡山から本郷半次郎、角南九八、中尾鹿太郎の三人が静岡の野沢弥輔、京都の人見常五郎氏らが参加した。この三会を軸に再発足が進められた。



日専連再建大会
昭和25年5月23日岡山公会堂で

日専連が戦後復活したのは一九五〇（昭和二五）年五月二二日である。この日、岡山公会堂で待望の再結成総会が開かれた。指導に当たった倉本長治氏や学者の山崎紀男氏も駆けつけて喜んだ。

参加者は北は小樽から南は鹿児島まで、次の三四地区から百数十名に達した。

北海道（小樽・札幌）、関東（日立・水戸・東金・横浜・静岡・豊橋・島田）、近畿（京都・大阪・中津川・宮津）、北陸（富山・福井）、中国（鳥取・米子・津山・総社・呉・尾道・三原）、四国（徳島・坂出・高松）、九州（小倉・若松・

博多・久留米・佐賀・直方・宮崎・鹿児島)。

本郷半次郎氏が第四代会長に就任し、事務局は岡山商工会議所の一室に置き、機関誌も昭和二五年八月から『日専連』として復活第一号が発行された。丸の中に「専」を描いた日専連マークが制定され、全国に地方連合会の結成を促すこととなった。

◆組織の強化・拡充

昭和二五年に朝鮮戦争が勃発して特需が発生し、糸へん景気が起きた。昭和二六年にはサンフランシスコで講和条約が成立し、二七

年には米軍駐留の条件付きながら念願の独立を果たした。

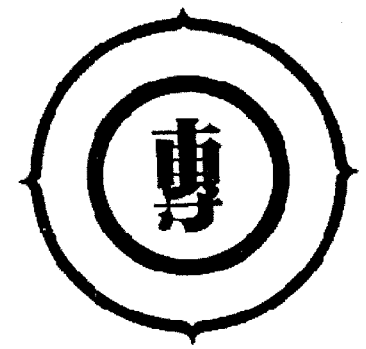
復活した日専連は、組織の拡充・強化と研修活動を積極的に進めていった。地方連合会の組織が着々と進んだ。昭和二六年に北海道・四国、二七年に東北・関東・東京・北陸・中部・東海・近畿・九州に地連が結成され、全国一―地連となった。二月には「協同組合連合会」として通産大臣の認可を受けて正式に発足した。

◆幸福社会づくり

全国キャンペーン展開

二六年から翌年にかけて、各地で「日専連週間」が催された。「日専連とは何か」をPRし、「お客様さまと店とが手を取り合って幸福な社会をつくらう」と広く社会に問いかけて大売出しキャンペーン

を展開した。



日専連マーク

小売店がこのような全国統一のキャンペーンを打つのは、今まで例を見ないことで大きな反響を呼んだ。日専連の名が国内に広がり、加盟店の意欲も高まった。中部地連では特賞で文化住宅一棟、北陸地連では中部日本一周旅行招待(五〇人)、関東地連では乗用車など豪華景品付き売出しが行われた。

二七年には「アメリカ招待・全国連合大売出し」も催した。特賞八本は空路アメリカ招待、一等から四等までは空路で国内旅行という内容で、中小企業庁や日本商工会議所が後援し、NHKや日本交通公社も協賛した。

二八年には「花のパリーロンドンへ空の旅招待」という抽選付きの全国大売出しを催した。

◆東京事務所の設置

組織の強化

日専連の全国活動が進み、昭和二七年には東京事務所ができた。はじめは南品川の妙円寺の横の建物に置き、次に神田多町の神田会事務所に移り、昭和二八年四月から現在の神田駿河台に東京事務局が設けられた。

日本織物出版社の社屋の一部を借り、そこには岡田徹氏の商業研

究所もあった。岡田氏の推薦で当時、公開経営指導協会の常務理事だった宗像平八郎氏を事務局長として迎えた。二月には岡山以来、番頭役だった田中利夫氏が事務局長に就いた。

日専連への加入会は一八〇を超え、加盟店数は八〇〇を上回る規模となっていた。連盟の指導力強化のため、本部長(角南九八)と三副本部長を置き、総務、企画、指導、調査、広報など一〇部を設けた。機関誌も二七号から『専門店会』と改め、組織の拡充と加盟店の経営問題も取り上げた。

◆既製服の先駆け

販売会社の発足

昭和二八年に日専連で既製服の会社が創られた。当時は既製服は安物というイメージが支配していた。これを払拭し、格調の高い一流の専門品を旨ざすことになった。岡田徹氏らの指導で日専連服飾株式会社(資本金五〇〇万円・社長は静岡会の野沢弥輔会長)など二つの会社を立ち上げた。

生地は別織り、デザインは杉野芳子、田中千代、中原淳一などのトップクラスに委嘱し、伊東絹子などトップモデルに着てもらったといった企画が進められた。

◆商業学会と研究活動の展開

昭和二九年五月には、日本商業学会と日専連との懇談会が大阪市の日経ビル内橋クラブで開催された。学会からは特に小売商業に

関係の深い二六人の学者が参加した。山崎紀男（関西大学）、村本福松（大阪商大）、清水昌（明治大学）、宇野政雄、原田俊夫（早稲田大学）、鈴木保良、片岡一郎（慶応大学）、竹林庄太郎（同志社大学）など著名な顔ぶれが揃った。日専連からは角南本部長、中尾企画部長、水野顧問や田中利夫事務局次長ら一〇人が出席した。

日専連は「人口問題や社会問題を基盤とした小売商問題」の抜本的な解明を提唱した。具体的にイギリスの商店法、西ドイツの商店統制法、フランスの小売商保護法などの内容も報告され、百貨店と小売商の調整について将来を見据えた論議が展開された。

◆実業界も巻き込み研究会

続いて六月に東京丸の内の日本工業クラブで、日専連小売商問題研究会が開かれ、商業学会のメンバーに加えて、中小企業庁、公正取引委員会、日本商工会議所、日本デパートメントストア協会、日中連などが参加した。八月には

帝国ホテルで「デフレ下の特売」をテーマに、先回とほぼ同じメンバーが中心となり研究会を開いた。深刻なデフレのなかで激化する特売の是非について論議された。

これがきっかけとなり、業種別研究会に進んだ。さらに中央だけでなく、全国各地で現地研究会が活発に繰り広げられていった。

◆青年会連合会を結成

昭和二九年九月に明治神宮外苑の青年会館で、三日間の青年講座が開かれ、全国から一五〇名が参加した。講師陣は日専連の角南九八本部長をはじめ、大学教授や商業界の新保民八副社長、公開経営の喜多村実専務理事らが顔を揃え、研修内容は経済問題から経営実務にわたった。

●日本経済の構造…山中篤太郎（一橋大学）

●デフレ経済の分析…木村健康（東京大学）

●売場配置と陳列品…原田俊夫（早稲田大学）

角南本部長は「日専連の目標」と題して商業者の道を説いた。「商業者と道徳」友松円諦。「商業者とPR」新保民八。「数字経営の実際」喜多村実と続いた。研究会では「日専連はいかにあるべきか」

に取り組み、「チケットと正札販売」「デパート、生協、購買会」を論議した。

この講座の最終日には、日専連青年会連合会の結成大会が開かれ、初代会長には岡山会の黒田孝一氏が選ばれた。

◆正札販売

NHKで放送

昭和三〇年ごろ日専連が進めた正札運動は、NHKの連続番組に組まれて全国放送で取り上げられた。「現金掛け値なし」は、遠く江戸時代の呉服店・越後屋から続く商いの本道だった。だが戦後のインフレ時代から、「売り手はふっかけ、客は値切らにゃ損」という悪弊がはびこった。

NHKでは、「お互いの信頼の上に立つ正しい商いの道を築こう」と日専連は提唱した。そして「値引きと正札」と題して五日間にわたって連続放送した。

第一回が原田俊夫・早稲田大学教授、第二回が金子有造・東京都商工指導所長、第三回は消費者の声を録音放送、第四回は日専連から角南九八、岩城二郎氏らが「正札運動とは何にか」を、第五回は日専連の座談会で大きな反響を呼んだ。



第1回全国ミス商店街の審査
左から角南九八、三橋達也、北原美枝、岩城二郎、若林勤の各氏

◆全国ミス商店街コンテスト

全国的な活動がますます活発となった。昭和三〇年、週刊朝日に連載した「銀座二十四帖」が映画化された。これを記念して日専連と日活の主催で雑誌「平凡」の後援を受け、全国から「ミス商店街」を募集した。審査員に角南理事長、岩城経営部長らが加わり、応募者一三一名の中から厳正な審査の結果、東京中央会の石橋洋子さんが選ばれた。日専連としての華やかな行事となった。

◆小学校の教科書に登場

「真商道によつて幸福な社会の建設を旨とす」。この目標を掲げ

た日専連の活動は、広く内外の注目を浴びた。小売商が物を売るといっただけでなく、世の中をつくるという使命をもち、その実現に向けて活動する。これは世界にも例を見ない素晴らしい姿である。

小学校社会科の教科書にも、新しい小売商業として取り上げられた。昭和二八年の小学校五年生社会科の指導書(教師用)に「日本専門店会聯盟」と題して、日専連の沿革、組織の性格、活動状況などが掲載された。二九年からは児童用の教科書に日専連組織の図解が載せられた。三五年から五年生教師用「産業のいとなみ」には日専連の沿革、機構と新しい商業者の使命について記された。

◆「組織を持つ」本郷半次郎会長の死去

日本経済は昭和二五年の朝鮮戦争景気から三〇年の神武景気へと



本郷半次郎氏
日専連・初代・4代会長

拡大し始めた。その途上、昭和三〇年一月七日、本郷半次郎は第四代会長の現職のままこの世を去った。享年六五歳だった。

本郷氏は昭和五年、岡山専門店会を立ち上げて副理事長に就き、一一年一〇月に東京での連盟結成から、一二年五月の岡山大会までの八カ月間、初代会長として創生期の連盟をまとめた。戦中は商士隊運動から商業報国運動に挺身し、戦後は日専連の復活に奔走した。

昭和二五年五月、岡山で開かれた再生第一回の全国大会から、昭和三〇年一月の死去までの五年半、四代会長として全力を尽くし、在職のまま正に武將の生涯を閉じた。一金物店の主人として、金にも名誉にも執着せず、ひたすら日専連の成長を楽しみに、指導に努力を傾けた。

三〇年五月には、長年にわたり中小商業の指導に尽力した功績で藍綬褒章を受章した。人柄は、カラリと晴れ渡った大らかな方だった。毛虫のような太い眉、怒れば人を振るい上がらせたが、温情豊かで面倒見がよかった。よく人を褒めて感動し、大きな目にはいっばい涙をためた。「よいお父さん」として一万の組合員から慕われた。

◆行動の人・角南九八・五代目会長も死去

本郷半次郎氏のあとを継いで、角南九八氏が第五代の日専連会長となった。スナミ洋品店の店主で、大正時代に中尾鹿太郎と赤ちゃん会をつくり上げた。昭和五年、本郷、角南、中尾の三羽ガラスで岡山専門店会を結成し、角南は総務部長となって組織づくりの大役を果たした。

青年時代に潔癖で神経質な角南に酒を教えたのは中尾。二人は映画監督の内田吐夢と親交があり、「吐夢の会」をつくり内田を招いてよく飲んだ。店を継いでから外交性と包容力も身に付いた。生来の緻密さと真面目さで、専門店会の組織の仕事も見事にこなした。

昭和二八年に「専門店会読本」一〇三頁の名著を著した。専門店会の役職員が目先のチケット売上げに幻惑され、根本の日専連運動の理念を見失うことへの警鐘でもあった。生産性本部の欧米視察団に加わり、八四日間にわたり欧米八カ国を視察し、昭和三十一年一月一六日に帰国したが、過労が体を蝕んでいた。NHKで帰朝談を放送した声は別人のようにかすれていた。休む間もなく近畿、四国、

東京と視察報告が続いた。「小売商は個々バラバラであってはならない。組織を持たねばならない。それを強化して経営の合理化を図るとともに政治力を養い、小売商人に襲いかかる問題は自ら手で解決し、闘いとらねばならない」これが持論だった。

明けて三三年正月、岡山で専門店会と日専連合同の新年互礼会に出席したが、どことなく元気がなかった。一月一三日、日曜日の朝、家人が起こしに行ったらすでに冷たくなって横たわっていた。

岡山市本行寺で日専連葬が営まれ、水田通産大臣以下、関係各界から一〇〇を超す楯が供えられた。日専連精神に徹し、「真心と誇りをもって商人の道を進み、明るく暮らしよ世の中をつくらう」という理念をひたすらに説き続けた人だった。



角南九八氏
日専連・5代会長